

高蔵寺ニュータウンのお荷物だった 「高森台県有地」迷走の末見つけた 斜面の活用（知恵と汗の物語）

愛知県春日井市 高蔵寺ニュータウン・ハナモモ桃源郷の会

お荷物…高森台県有地

高蔵寺ニュータウンは日本3大ニュータウンの一つと言われ名古屋の東北部の丘陵地に約60年前に建設が始まった。敷地の一角に問題の「高森台県有地」はある。約8万平方メートルの広大な雑壇状の造成地は見上げるばかりの巨大な斜面（法面）に囲まれた赤松などが生い茂る荒地で、当初から手つかずのまま放置され続けてきたいわばニュータウンのお荷物だった。

市民が立ち上がる

今から8年前（2012年）、愛知県がその敷地の一部に高齢者福祉施設を建設する旨

の説明会が開かれた。しかし担当者によって、残り大半の敷地は今後の活用計画のメドが全く立っていないことも明らかになった。これを聞いた住民は「もう行政だけに任せておくわけにはいかない、市民住民が立ち上がって、この荒涼たる県有地を市民の手で利活用しよう」と、この説明会をきっかけに「高森台県有地の活用を提案する市民の会」が発足した。

苦難の道が続く

関心のある市民30人ほどが集まり、会は順調に滑り出した。まずは市民からの「要望アンケート」を徴収。その集計結果をまとめてタタミ一畳もある大模型を作成し、愛知県や担当行政の春日井市へその模型を持ち込み、



長いこと放置されてきた高森台県有地。巨大な斜面（法面）が目に飛び込んでくる

県有地の有効的な利活用を熟っぽく説明して歩いた。しかし、待てど暮らせど、会が提案



したいくつかの提案やアイデアに対して、行政の建設的な回答や実施計画などの具体的な返答は返ってくることはなく、足踏み状態がその後長く続いた。

そもそも提案に無理があった

時間が止まってしまった期間は、冷静に考えることのできる期間でもあった。いくつかの問題点が指摘された。

- ① 「図書館が欲しい」、「スポーツ施設が必要」、「温泉が欲しい」などなど、「提案」というよりか、ほとんどが行政への「要望」であった。
- ② 立地条件や建設コストなど現実的検証もな



長野県阿智村の「花桃の里」。ハナモモの咲き乱れる土手を県有地の斜面と置き換えて、県有地の外周道路側斜面にハナモモを植えることを思いつく

い、いわば「夢プラン」をまとめたものになすぎなかった。

- ③ 市民提案といいながら「市民」が主体的に参加し活動する提案やアイデアはほとんどなかった。
- ④ 資金や技術を持たない市民が広大な県有地

全域とかかわるには無理がある。敷地の一部に特化して考える必要がある。

巨大な斜面（法面）に目を付けた〜長野県阿智村の「花桃の里」がヒントに〜

どのようにしたらかわかることができるか、もんもんとした年月が流れていった。

目を付けたのが、外周道路をぐるっと取り巻いている巨大な斜面（法面）であった。ここを整備するだけで道路側からの景観は激変する。実際問題、単なる任意団体が県有地内で活動できることは、きわめて限られている。県有地を借り受けて事業を展開することなどは、ないないづくしの会としては到底不可能であった。そこで、最終的にたどり着いたのが、県有地の外周道路に面した斜面（法面）にハナモモを少しずつ植えて、ハナモモで県有地を包み込み、この周辺をハナモモの咲き乱れる桃源郷にしよう、というものだった。かつてこの周辺は桃の一大生産地でもあり故郷再生とも重なって、「ハナモモ」を植える理由も

理解が深まった。会が発足して3年目にしてようやく活動の場を「斜面」だけに絞り込むことに基本方針が決まった。見捨てられていた「斜面」に光が当たった。

そんな中、長野県阿智村の「花桃の里」のことが話題になった。調べてみると私たちが抱えている問題と根っここのところで大変似ている状況がわかってきた。

今から30年ほど前のことである。中央自動



愛知県と使用管理者とハナモモの会の三者で斜面にハナモモを植えることで了解が成立し、2017年第1回ハナモモ育樹祭を開く。150名もの市民が参加し大盛況

車道恵那山トンネルから出土した膨大な残土が阿智村の一角に雛壇状に積み上げられていた。村民の一人、故渋谷秀逸さんはこの殺風景な風景を何とかしようと考えた末、「地域がきれいだと気持ちも明るくなるだろう」とただ一人で「ハナモモ」を植え始めた。4年間で千本の苗木を植え続けた。

この努力が次第に地域の人々を動かし、現在は1万本のハナモモが咲き乱れる「日本の花桃の里」となり、年間20万人もの人々が桃源郷を目指して訪れる一大観光地となりハナモモによる地域活性化が実現した。私たちの求めていた原点がここにあった。

2015年、私たちは現地を訪ね、まだお元氣だった渋谷さんにお会いし、詳しく花咲か爺さんの話を伺った。その後も何度か足を運び、ついに村の花桃実行委員会の皆さんの



春日井市も積極的に支援、育樹祭には毎回、市長も参加。近所の子どもたちと植樹

了解を得て、阿智村のハナモモの苗木20本を譲っていただく確約も取り付けた。

関係者の摺り合わせが続く

2014年、敷地内に高齢者福祉施設「どんぐりの森」がオープンした。しかし、外部の緑化整備には手がまわらず、外周道路側の斜面（法面）は荒地地のままむき出しになっていた。早速、私たちは、所有者である愛知県、使用管理者のどんぐりの森、ハナモモの会、三者による会合を呼びかけ、「ハナモモの会」が主導して斜面にハナモモを植える緑化計画「ハナモモ桃源郷プロジェクト」を説明し複数回の摺り合わせの結果、ついに「第1回ハナモモ育樹祭」が2017年2月4日、実現することになった。

ハナモモ育樹祭、そしてこれから

第1回ハナモモ育樹祭は150名を超える市民が集まり大盛況であった。新聞各紙も大きく取り上げていただいた。現在まで毎年1回、計4回開催され、毎回100名を超える市民が参加、また植栽面積も広がりすでに300本を超える苗木が植栽されるまでに発展してきた。小さいながら紅色、白、三色などの艶やかな花を咲かせ始めた。一方担当自



2017年の第1回ハナモモ育樹祭に植えた苗木。すでに色とりどりの花が咲き始めた。厄介者の斜面が生き返った

治体である春日井市も、市民協働を市の基本として掲げてきたこともあり、「ハナモモの会」の活動に注目。育樹祭は第1回から毎年市長も参加されている。県が力を入れている福祉関係の施設の建設も進み、入居されている高齢者や知的障がい者、その家族の皆さん、施設関係者、関心のある企業などいろいろな方々の協働が実現されつつある。

いつの日か、ハナモモ桃源郷として地域住民に親しまれ、ハナモモの咲き乱れる下を散策する姿をイメージしながら維持管理に汗を流している。

（高蔵寺ニュータウン・ハナモモ桃源郷の会

代表 寺島靖夫